

る許りでなく、此龍首に對して神祕觀が起らなかつたであらうか。劍の頭より激る血が化して神となり、龍蛇の形を以て表はされた雷の類になつたといふ神話も、恐らく此種の劍に對する信仰より生じたのであらうと思はれる。

茲で再び蛇之倉正・蚺韓鋤・天蠅斫之劍を顧るに、既に韓鋤といふ名稱の示す如く、韓土より渡來した物であることを語つてゐる。古人は八岐大蚺を斬つた爲めの名と解したのであるが、寧ろ太刀其物の形狀から得た名稱ではなかつたらうか。天之尾羽張劍なども、若し羽々といふ古語が大蛇を意味するならば、同じ様に、龍蛇の形に關係した名前であつたと思はれるのであつて、更に憶測を巡せば、八岐大蚺の形體も亦同じ思想の下に生れた、劍と蚺との説明神話ではなかつたかと思はれるのである。

## 神の惡魔要素

本會研究員  
東京帝大神道研究室在勤

溝口 駒造

會て人間生活の早期には、神と惡魔との對立はなかつたと想像せられる。其處には只、超人間的な思議を絶した自然の威靈力に對する恐怖と戰慄とがあつた。彼は人類に死を與へ、其他又多くの害惡を現

したからである。乍併我々人類の祖先たちは、間もなく又、其恐るべき威靈力が、生物に生命を與へ、其他種々の恩恵を齎す一面の在ることを知つた。これが神と悪魔(又は善靈と惡靈、善神と惡神)との對立を見るに至つた起源である。一般に神(善靈、善神)は建設的で、人類を幸福に加護づけるのに對して悪魔(惡靈、惡神)は常に破壊的で、人類に不幸なる害惡効果を誘致するものとして信ぜられる。

此の神と悪魔との對立が、我が日本民族の間では神と惡神との對立として最初に語られてゐる。「汝是惡神」とか「天有惡神」とか云ふ類の記述は、例へば紀記神代卷の或るページに任意に觸目する事に依つても容易に發見せられる。乍併愉快な事に、我が日本に於ては、それ等惡神の持つ惡魔的要素は、極めて稀薄であり、輕度であり、痕跡的である。あらゆる惡神の檢討の後に集約せられる通有要素の顯著な結晶は、たゞ「兇暴」の一つに歸する。經津主・建甕槌二神が蘆原中國に遣された使命も要するに兇暴な神即ち「荒ぶる神たち」の征服に存したのである。是等の荒ぶる神たちは、又、「ちはやぶる神」の語を以ても呼び換へられてゐるが、斯かる惡神征服の神業が、其後幾たびか繰返された結果、凡ての惡神は漸次に亡滅せられ、後に佛教が佛陀對惡魔の二元思想を新しく輸入するまでは、此の日本國土に惡神の跡を絶つたと信ぜられたのである。即ち我が日本には、結局只善神のみが神の名を以て仰がれたのである。これは恐らく我が日本にのみ見られる珍しい現象であらう。

乍併茲に重要なのは、悪神が絶滅した後にも、人類に對する超絶威力の害惡的效果は依然として現された事である。上代人は之を如何に清算したかと云ふに、畢竟は神の中に惡魔的要素を吸収せしめて、其害惡發現を、殊別なる神意の現れとして觀たのである。紀・記・風土記等の説話中には、往々神が顯著なる理由もなしに神前通過者を殺害し、或は傳染病を猖獗な流行に置いて人類の大殺戮を敢てしてゐるが、これは要するに、神が示す惡魔的プロフィールの表現に外ならない。此の恐るべき神の威烈の害惡的表現は、後に(一)懲罰(二)警告の爲にする神の祟として説明せられたが、面白い事に斯かる害惡性の神への移行は、同時に曾て惡性の神のみに冠せられた「ちはやぶる」の語をも神の冠辭として殘した。即ち神の中に「ちはやぶる」若くは「荒ぶる神」の要素が吸収されて變貌しつゝ存在することを、「ちはやぶる」といふ神の枕詞が明白に語つてゐるのである。神の靈力の表現に「荒魂」と「和魂」との二方面があると云ふ事も、要するに如上の過程の中に羽ぐくまれた觀念であらうと私は考へる。それ等のプロセスの委しい叙述は、別の機會に譲るが、私が茲に主張して置きたいのは、神の荒魂とは、畢竟、善神の中に吸収されて殘つた神の荒びの一面の進化、即ち神に於ける惡魔要素の變貌だと云ふ事で、而もその荒魂——純化された神の威烈的方面が、和魂と相互に作用しつゝ、靈能を發揮するところに、日本の神のみが有する貴い神性の光が仰がれるのである。(昭和七・六・一五)